



ACTIVITY REPORT

活動報告2014

フューチャー イノベーション フォーラム

代表メッセージ

フューチャー イノベーション フォーラム (FIF)は、「イノベーションで人と社会を豊かに」というコンセプトのもと、人びとが組織の枠組みを越えて協力し合い、広く社会の発展に貢献することを目指し、2006年1月に設立いたしました。2014年12月末現在、約650社、1,250名の皆様にご賛同賜り、日本の未来を担う子どもたちに向けた活動には、のべ1,880名にご参加いただきました。ここまで継続できましたことは皆様のご厚情の賜物であり、心より御礼申し上げます。

設立以来、ITをはじめとした先端技術は目覚ましく進歩し、グローバル競争はますます激化しています。日本では、急速な少子高齢化や国際社会におけるプレゼンスなど社会構造や国の在り方が問われ続けています。世界情勢が激変するなか、日本の確かな未来を切り拓いていくには、大きな転換期を迎えている今をチャンスと捉え、リスクをとってチャレンジすることが不可欠です。これまでの延長線上にはない「イノベーション」を起こすことが、企業や政府などの組織のみならず個人にも求められています。

私たちは活動を通じて、日本の明るい未来に向けたビジョンを描き、社会に変革を起こしていきたいと考えております。次世代リーダーが集い相互研鑽する場や、子どもたちが自身の未来を描くきっかけとなる場を提供し、世代を超えて人と人をつなぐことで、新たな価値や可能性、そしてビジネスの芽を見出してまいります。

私たちの活動は、2016年1月に10周年を迎えます。

今後も活力あふれる豊かな社会を築くプラットフォームとなり、イノベーションの実現に寄与するとともに、日本社会の発展に貢献していく所存です。

引き続き皆様のご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。



フューチャー イノベーション フォーラム代表

ウシオ電機株式会社
代表取締役会長

Handwritten signature in black ink, appearing to read '宇野 浩之' (Ushio Hiroshi).

フューチャーアーキテクト株式会社
代表取締役会長兼社長

Handwritten signature in black ink, appearing to read '金丸 景文' (Kanemaru Keiichi).



フューチャー イノベーション フォーラム 特別鼎談

フューチャー イノベーション フォーラム代表による新春恒例の特別鼎談。
LIXILグループ社長の藤森義明氏を迎え、日本の課題と展望について語っていただきました。

株式会社LIXILグループ
取締役代表執行役社長兼CEO

ウシオ電機株式会社
代表取締役会長 FIF代表

フューチャーアーキテクト株式会社
代表取締役会長兼社長 FIF代表

藤森 義明 × 牛尾 治朗 × 金丸 恭文

日本経済の課題解決へ向けて

金丸 2014年は円安が進み、株価もリーマンショック前につけた高値の水準に戻りました。今年の日本経済をどのように見えていますか？

牛尾 ようやく景気的好循環が巡ってきたと感じています。

藤森 我々が身を置く住宅市場でも905億円の住宅エコポイント(2014年度補正と2015年度予算の合計)が追い風となり、リフォーム需要を刺激しています。ただ、近年の景気動向をみていると、政府の経済対策や金融政策によって一時的に消費は上向くものの、その後は落ち込むという短期サイクルを繰り返しているように感じます。

金丸 短期に終わらせず、長期的な成長へつなげるには何が必要だと思いますか。

藤森 我々サプライサイドの生産性をあげていき、好循環が続くしくみをつくる必要があります。たとえば高齢者は健康で快適な生活を送りたいと願っています。リフォームで家の断熱性を高めたりバリアフリー化をしたりすれば、より快適に暮らせるだけでなく、家自体の価値もあがるわけですから、そういった住宅を投資対象として税制優遇すれば、流通もより活性化し、一部の高齢者が保有している何

兆円という資産が市場に流れてくるのではないのでしょうか。住宅市場が経済に与える影響は少なくありません。

牛尾 少子高齢化による人口減少や市場縮小も大きな課題です。とりわけ税金を必要とする人が増え、納税する人が減っているのは深刻です。納税者を増やすためには、もっと女性や高齢者が社会進出できるしくみや、日本に魅力を感じる外国の方々が安心して日本に住める制度を作っていくことも解決の糸口になると思います。

イノベーションを生み出すには

藤森 先日スイスで開催されたダボス会議に参加したのですが、世界中で急速に進むデジタル化が大きな話題となり、日本企業にも変革が必要であると痛感しました。

金丸 デジタル化の波は避けられません。今の子どもたちが大人になったとき65%が今は存在しない職業に就くという予測もあるように、人の仕事がITやロボットなどに取って代わられる時代がやってきますし、世界では第四次産業革命が進行しています。ただ、企業が変わるためには破壊的なイノベーションが必要なわけではなく、これまで日本企業が積み重ねてきた蓄積のなかからもイノベーションは起こせると思います。



藤森 義明 (ふじもりよしあき)

東京大学工学部卒。1975年日商岩井(現・双日)入社。81年カーネギーメロン大学MBA取得。86年日本GE入社。米GE上席副社長、日本GE会長などを歴任。2011年より現職。



牛尾 治朗 (うしおじろう)

東京大学法学部卒。1953年東京銀行入行。64年ウシオ電機設立。経済同友会代表幹事、経済財政諮問会議議員などを歴任。総合研究開発機構会長。経済同友会特別顧問(終身幹事)。



金丸 恭文 (かねまるやすふみ)

神戸大学工学部卒。89年フューチャーシステムコンサルティング(現フューチャーアーキテクト)設立。産業競争力議員。規制改革会議委員。内閣官房IT本部本部員。経済同友会副代表幹事。

藤森 イノベーションを生み出す源泉は「人」です。デジタル化のなかで自社のリソースの使い方を変え、多様な人が活躍し、新しいものを生み出せる環境をつくるのが、経営者の役目だと思います。そうして企業がもっとイノベティブになれば、もう一度、世界における日本企業の存在感を取り戻せるはずですよ。

牛尾 そうですね。かつてトヨタが自動車業界で世界を制したのは、従来の「いい車を作って顧客を待つ」やり方ではなく、「消費者に近づくためのシステムを構築する」という、非常にイノベティブなサービスへのシフトを実現したからだと言えます。

藤森 住宅業界にも、イノベティブな住空間を創造できる人材が求められています。

牛尾 今後は一消費者がインターネットやSNSを通じて、グローバルなサプライチェーンから直接モノやサービスを購入するといった消費行動がより盛んになってくるでしょう。ビッグデータを活用することで消費者の欲求に近づき、国境を超えた新たなビジネスモデルをつくれるかが、日本企業の再興の鍵を握っています。

金丸 問題なのは、日本はビジネスや社会のしくみを変えることができるITの技術者の数が、米国やインドに比べて圧倒的に少ないということです。日本の情報系学部の卒業生は毎年約2万人。米国は約4倍、インドは約30倍の人材を輩出しています。大学でもコンピュータサイエンスを情報系学部だけでなく、全学部の基礎科目に入れて技術に強い人材を増やす改革が必要です。

グローバルに活躍する人材を育てる

金丸 グローバルで戦えるリーダーの育成についてはどのようにお考えですか？

藤森 ビジネスに国境がなくなっている今、世界全体を市場と捉えられる視点をもったグローバルリーダーを育てることが急務です。

牛尾 そのためにも、各企業は人材育成制度を整備していかなければならないでしょう。

藤森 私はビジネスパーソンにとって最も重要な時期は、35歳から45歳だと思っています。この年代はちょうど働きざかりで、大半が目前の仕事に没頭し、「働きマシン」になりがちですが、もっと世界に飛び出し、あらゆることに挑戦してほしいですね。私自身、35歳のときにスーツケース2つで単身アメリカに渡り、リーダーシップをはじめ多くのことを学びました。経営者としての基礎をつくったのは、この時代だと言えます。

金丸 世界に伍する人材になるためには、まず外の世界を知り、自分自身の軸をつくるのが大切です。リスクを恐れず気概をもって、今まで経験したことない未知の世界にチャレンジしてほしいと思います。

牛尾 コンフォートゾーンに身を置いている限り、自身の殻を破ることはできないということですね。

藤森 一度外に出て、自身を客観的に見つめ直すことのないまま働き続けるのは、社員にとっても企業にとっても大きな損失です。社員はもっとチャンスを求めるべきですし、企業もそうした環境を整え、機会を与えるべきです。

牛尾 グローバルリーダーの資質を身につけた社員が戻ってきたとき、「この会社なら学んだ経験を活かせる」と感じてもらえるよう、企業側は社員以上に成長していなければなりません。日々変革し、進化していく姿勢こそ、今後の日本企業に最も必要なことなのではないでしょうか。

(2015年1月30日実施、文中敬称略)

文責:Future Innovation Forum

Contents

FIFについて about FIF

about FIF 01

代表メッセージ

ウシオ電機会長 牛尾治朗
フューチャーアーキテクト会長 金丸恭文

▶ P.1

会員向け企画 Activities for Members

活力ある日本の未来に向けて、企業や
業界の枠を超え、次世代リーダーが相互
研鑽し交流する場を提供しています。

members 01



特別鼎談

LIXILグループ
藤森義明社長を迎えて

▶ P.2-3

キッズ企画 Activities for Kids

日本の未来を担う子どもたちに向けて、
知的好奇心や創造力を育む体験型プロ
グラムを実施しています。

kids 01



職業体験プログラム

・物流の最前線(2014年4月)
・セキュリティの最前線(2014年8月)

▶ P.16-19

about FIF 02

FIFの理念と活動

コンセプトと活動概要
 アドバイザリーボードメンバー
 2014年の活動コンセプト・実績

▶ P.6-7

about FIF 03

プレスクリッピング

2014年度のメディア掲載実績

▶ P.23-26

members 02

**イノベーションセミナー**

・イノベーションで日本を強く(2014年7月)
 ・グローバル競争を勝ち抜く企業経営
 (2015年2月)

▶ P.8-9

members 03

**イノベーションワークショップ**

グローバル競争を勝ち抜く企業経営
 (2014年9月~12月)

▶ P.10-15

kids 02

**追跡アンケート調査**

2009年度のイベント参加者を対象とした追跡調査

▶ P.20-21

kids 03

**プログラミング教室**

お天気アプリを創ろう!(2014年8月)

▶ P.22

FIFの理念と活動

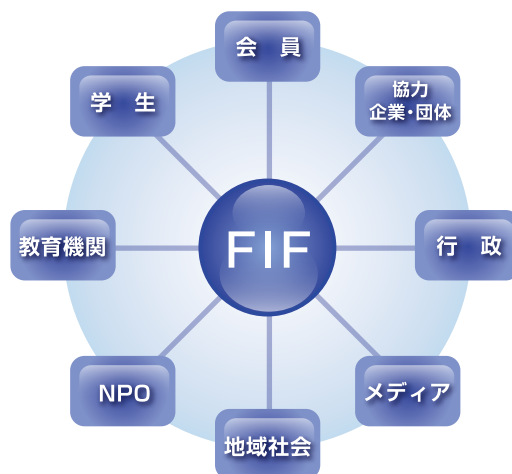
ITイノベーションで人と社会を豊かに

フューチャー イノベーション フォーラム(略称:FIF)は、「ITイノベーションで人と社会を豊かに」という理念のもと、企業同士が協力しながら社会に貢献し、変革をもたらしていくことを目的に2006年1月に設立した社会貢献団体です。活動の趣旨にご賛同いただいている約650社の協力企業・団体の社員を中心とした会員組織で、会員数は2014年12月末現在で約1,250名にのびります。

発起人であるウシオ電機株式会社 代表取締役会長 牛尾治朗とフューチャーアーキテクト株式会社 代表取締役会長兼社長 金丸恭文が代表を務め、日本を代表する経営者、知識人、総勢16名のアドバイザーボードメンバーに助言いただきながら、フューチャーアーキテクト株式会社(本社:東京都品川区)が会を運営しています。

設立以来、日本の未来はどうあるべきか、また豊かな社会をつくるために企業は何をすべきかという観点から、様々な企業の次世代リーダーが互いに切磋琢磨し交流できる場や、子どもたちが将来の夢を描くきっかけとなる場を提供しています。FIFが学生と企業、企業と学校、地域とNPOなど人と社会をつなぐ役割を担い、活動の輪も少しずつ広がっています。

FIFの活動は「会員向け」と「キッズ向け」があり、会員の方々を対象に日本の企業が抱える共通課題について議論するセミナーやワークショップを定期的で開催しています。また子どもたちに対しては、多くの協力企業・団体とともにキャリア教育を主眼とした職業体験や出張授業などを企画・運営しています。



会員向け企画

**次世代リーダーを育成し
日本の未来に活力をもたらす**

セミナー ワークショップ

キッズ企画

**未来を担う子どもたちの
夢・可能性を広げる**

職業体験 プログラミング教室

FIFの使命は、日本の明るい未来に向けて、企業同士をつなぎコラボレーションを促すことで新しいビジネスの芽や可能性を見出すとともに、未来を担う子どもたちの夢や創造力を広げていくことです。

アドバイザーボードメンバー

- 明石 勝也 聖マリアンナ医科大学 理事長
- 伊藤 元重 東京大学大学院 経済学研究科 教授
- 牛尾 治朗 ウシオ電機株式会社 代表取締役会長
- 金丸 恭文 フューチャーアーキテクト株式会社 代表取締役会長兼社長
- 川本 裕子 早稲田大学大学院 ファイナンス研究科 教授
- 栗和田 榮一 佐川急便株式会社 会長
- 小島 順彦 三菱商事株式会社 取締役会長
- 鈴木 茂晴 株式会社大和証券グループ本社 取締役会長
- 張 富士夫 トヨタ自動車株式会社 名誉会長
- 中西 勝則 株式会社静岡銀行 代表取締役頭取
- 新浪 剛史 サントリーホールディングス株式会社 代表取締役社長
- 藤沢 久美 シンクタンク・ソフィアバンク 代表
- 藤森 義明 株式会社LIXILグループ 取締役 代表執行役社長兼CEO
- 増田 宗昭 カルチュア・コンビニエンス・クラブ 株式会社 代表取締役社長兼CEO
- 三木谷 浩史 楽天株式会社 代表取締役会長兼社長
- 渡 文明 JXホールディングス株式会社 名誉顧問
(2014年12月末現在 氏名50音順敬称略)



アドバイザーボードミーティングにて(2014年6月)

2014年度の活動コンセプト・実績

会員向け企画コンセプト：グローバル競争を勝ち抜くための相互研鑽

キッズ企画コンセプト：世界に誇れる人材をFIFから

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
全体	★ 特別鼎談			★ 2013年度 活動報告書 発行		★ 第9回 アドバイザーボード ミーティング						
会員							★ 2014年 総括セミナー		★ 第1回 ワークショップ	★ 第2回	★ 第3回	★ 第4回 ★ 2015年 総括セミナー
キッズ	★ 追跡アンケート 調査実施			★ 物流の最前線			★ 首都高子ども支援 イベント運営協力	★ プログラミング教室				★ セキュリティの最前線

次世代リーダーを育成し、日本の未来に活力を イノベーションセミナー



FIFは日本の未来や企業はどうあるべきかという観点から毎年テーマを設定し、セミナーを開催しています。企業同士が協力することで自社のビジネスの可能性を広げ、業界や業種の枠を超え、次世代リーダーが相互研鑽できる場を目指しています。

イノベーションで日本を強く

2014年7月3日開催 ANAインターコンチネンタルホテル東京(東京都港区)

2013年9月から4か月にわたり実施したワークショップの総括として、2014年7月3日にイノベーションセミナーを開催しました。三菱商事株式会社 中原秀人様の特別講演では日本における商社の成り立ちやビジネスの変遷、今後の展望についてお話いただきました。また、第二部はワークショップの講師陣によるパネルディスカッションを行い、「イノベーションの根底にあるもの」や「イノベーションを生み出すために必要な環境」について議論いただきました。

■ 第一部 特別講演「変化する経営環境と総合商社の将来像」

三菱商事株式会社 代表取締役副社長執行役員 中原 秀人様

日本の商社の原点は物の売買を仲介するトレーディングであるが、経営環境の変化に合わせて新たなビジネスモデルを構築してきたからこそ三菱商事は成長できたと思っている。また、当社は原料から製品までのバリューチェーンに幅広く参画している。商社が生き抜くためにはバリューチェーン全体を見据えて利益を享受できる仕組みを考え作らなければならない。そして何より顧客の需要に応える現場主義の原点を忘れてはならない。

今後はリスクコントロールを更に強化して資源事業と非資源事業のバランスを取っていき、中期経営計画の利益を達成していきたい。



中原 秀人様

■ 第二部 パネルディスカッション「日本の強みを活かしたイノベーションとは」

パネリスト: 経済産業研究所コンサルティングフェロー 安藤 晴彦様
慶應義塾大学環境情報学部准教授、医学部准教授(兼担) 神成 淳司様
e-CORPORATION.JP株式会社 代表取締役社長 廉 宗淳様

コーディネーター: サイバー大学 IT総合学部教授 前川 徹様

イノベーションを起こすためには、制約や障壁を乗り越え、優れた技術の組み合わせと仕組みを作ることが必要である。日本は同系同質の人間を育てることに長けているが、それだけではなく、今後は出る杭を引っ張りあげ、いかに飛び抜けた人材でチームを作っていけるかが重要な鍵を握る。社会の新たなパラダイムを描くためには、「価値共創」や異業種交流を含むネットワーク構築も非常に重要であり、ITをコストではなくプロフィットセンターとして捉え今までのやり方を全面的に変えることで新たなビジネスに挑戦していくべきだ。



グローバル競争を勝ち抜く企業経営～変革への挑戦

2015年2月26日開催 ANAインターコンチネンタルホテル東京(東京都港区)

2014年9月から12月まで全4回にわたり実施したワークショップ*の総まとめとして開催したイノベーションセミナーには、100名を超える方々が参加されました。特別講演では株式会社良品計画 松井忠三様に「グローバル競争を勝ち抜くための人間育成・リーダーシップ」と題し、同社の海外展開のあゆみと人材育成についてご講演いただきました。また、ダイキン工業株式会社 大森淳一様、日本コカ・コーラ株式会社 岡慎一郎様を交えてのパネルディスカッションでは、各社の事例を紹介いただいた後、「グローバル競争を勝ち抜くために日本企業に必要なこと」をテーマに参加者との質疑応答形式で議論いただきました。

※詳細はP10～15に掲載

■ 第一部 特別講演「グローバル競争を勝ち抜くための人間育成・リーダーシップ」

株式会社良品計画 代表取締役会長 兼 執行役員 松井 忠三様

無印良品は1991年に海外初出店を果たしたものの、一時は赤字が続き戦略の転換を迫られる時期もあった。しかし、世界に存在するのは「グローバル」ではなく「ローカル」だという考えのもと、各国に合った戦略を取ることで2015年1月末現在では海外に301店舗を展開するグローバル企業へと成長した。またMUJIGRAMなど現場の声を反映しながら業務標準化を行う仕組みを確立している。さらに、世界で通用する人材育成にも力を入れており、たとえば全課長が海外で実務経験を積む制度や組織力の強化と適材適所への配置を実現するための仕組みも整えた。2014年はカナダでの展開もスタートし、今後も益々海外での売上を伸ばしていく予定だ。



松井 忠三様

■ 第二部 パネルディスカッション「グローバル競争を勝ち抜くために日本企業に必要なこと」

パネリスト: ダイキン工業株式会社
 グローバル戦略本部 営業企画部長 大森 淳一様
 日本コカ・コーラ株式会社
 人事ディレクター&ストラテジックビジネスパートナー 岡 慎一郎様
 株式会社良品計画 代表取締役会長 兼 執行役員 松井 忠三様

コーディネーター: 明治大学 経営学部 教授 大石 芳裕様



参加者との意見交換のなかで、「人材」、「ブランド」、「現地適合化」、「ICT」といったキーワードに関して各社の取り組みに触れた。グローバル展開において良品計画が行っている総合的な取り組みや、インターブランド社のブランドランキングで10年以上トップを守り続けていたコカ・コーラ社がどのように日本独自のブランドを管理し、グローバル人材を育成しているかを紹介いただいた。また、ダイキンは日本の電機メーカーで唯一成功しているといってもよい存在だが、なぜその地位を獲得できているのかも具体的な戦略を交えながら解説してもらった。ICTの発展によりますますグローバル化が進むなか、日本でも食品、自動車、電器、業種に関係なく、互いに学んでいくことが重要である。



次世代リーダーの育成と会員同士の交流を深める場としてワークショップを開催しています。2014年度はグローバル進出企業のビジネスモデルや人材育成、ITの活用事例などについて講義とディスカッションを重ね、日本企業に必要な国際競争力について考えました。

シリーズテーマ： グローバル競争を勝ち抜く企業経営 ～変革への挑戦

コーディネーター： 明治大学 経営学部 教授 **大石 芳裕 様**

会場： フューチャーアーキテクト株式会社 本社(東京都品川区)



大石 芳裕 様

プログラム概要

第1回 業務改革を支える“MUJI流”システムの取り組み

第2回 イノベーションと多様性－Who is least like me?

第3回 日本の技術をコアとしたビジネスモデルの可能性について－LIXILの取り組み

第4回 日本のサービス産業の海外進出と課題－中小・中堅、地方企業の事例をふまえて

参加企業 **34社** (社名50音順)

アヴァトレードジャパン株式会社

ウシオ電機株式会社

オリックス株式会社

株式会社外為どっとコム

株式会社カカクコム

カルビー株式会社

株式会社QUICK

株式会社群馬銀行

佐川急便株式会社

サッポロホールディングス株式会社

サントリービジネスエキスパート株式会社

JX日鉱日石エネルギー株式会社

敷島製パン株式会社

株式会社静岡銀行

株式会社常陽銀行

スターバックスコーヒージャパン株式会社

全日本空輸株式会社

総合警備保障株式会社

ソフトバンクモバイル株式会社

株式会社大丸松坂屋百貨店

ドコモ・ヘルスケア株式会社

ナイキジャパングループ

日本郵便株式会社

株式会社乃村工藝社

株式会社マネースクウェア・ジャパン

マネックス証券株式会社

三井不動産株式会社

株式会社三越伊勢丹ホールディングス

三菱商事株式会社

三菱UFJニコス株式会社

株式会社ヤオコー

楽天証券株式会社

株式会社LIXIL

株式会社ローソン

業務改革を支える“MUJI流” システムの取り組み

2014年9月16日開催

株式会社良品計画 常務取締役

情報システム担当部長 小森 孝様



講演概要

システム部門の役割と改革への取り組み

良品計画は「マーチャンダイジング(MD)プロセスを機敏に進化させ、競争力を高める」という経営課題を解決すべく、2006年に従来のシステムの全面刷新を図った。「スピード重視」、「7割主義」、「リスクテイク」という3つの基本方針を掲げ自社開発を導入し、利用部門と一体となり業務改革を推進してきた。

トップダウンとボトムアップによる業務改革

会社としては業務改革を持続させるため、トップダウンとボトムアップの仕組みを確立し、業務を可視化することで徹底して実行する風土を根付かせている。ボトムアップによる「改善提案制度」からは新しい仕組みも生まれ、システムに関する改善も行われている。さらに、トップダウンによる決定事項や業務連絡等は、システムで全社員が共有する仕組みを作ったことで、決定事項や課題に対する全社員の実行力が上がり、改革が持続する“実行する風土”が作られている。

グローバル化への対応

良品計画のグローバル化における基本方針は「ローカライズ」、「当事者意識」、「タスクフォース型人事交流」である。日本側が保守的にならないよう、人事交流を活発に行い、現地の協力者と一緒に課題解決や業務改善を行っている。また、グローバル展開にともなうシステムでは、日本のシステムをベースに各国とのシステム最適解を模索しながらグローバル・サプライチェーン・マネジメント(GSCM)の構築に注力しており、各国の自主性を尊重し、経営形態に柔軟に対応しつつ商品供給と在庫共有をグローバルに統一するコアプロセスの共通化を目指していく。

コーディネーター総評

原材料供給業者から流通業者までのチャネルメンバーを一気通貫で管理し、全体適性を達成するSCMIは、国境を越えることでさらに難しくなる。企業によって様々なGSCMの仕組みがあるが、基本的にはリードタイムを短縮し、市場の変化に迅速かつ柔軟に対応していくことが重要だ。そのためには「延期論理」にもとづく消費者に近いところでの意思決定が必要だが、「投機理論」にもとづく「規模の経済性」を無視してよいわけではない。「延期」の傾向を強めながら両方のバランスを取ることが必要である。さらに制約理論(TOC)のとおりに、改善はある工程が遅い、速いといった部分最適で行うのではなく、全体最適で行う必要がある。問題を見つけたら次々に最適化を図り、継続していかなければならない。

SCMの効果は単に在庫が減るだけではなく、新商品とデッドストックの割合など在庫の質も変わっていくことにある。またSCMIにはある程度のコストがかかるため、利益率やキャッシュフローで成果を測るのではなく、納期の遵守率やリードタイムなど何を評価指標にするのが重要であり、トップマネジメントのサポートがあってこそ実現できる。

良品計画はSCMをはじめ業務の様々なことをしっかりと「仕組み化」している。それは人材育成にも反映されており、各企業が自分たちに合った仕組みを作るための非常に良いお手本になると思う。



イノベーションと多様性 - Who is least like me?

2014年10月23日開催

横河電機株式会社 イノベーション本部 研究・事業開発センター
組織学習イニシアチブ シニアマネージャ 伊原木 正裕様



講演概要

研究部門のミッションと課題

横河電機グループは海外売上比率が約7割、海外社員比率が5割以上を占める多国籍企業である。同社の研究開発部門であるイノベーション本部は2014年の春から組織がフラット化され、技術者は自らのアイデンティティを持ったイントレプレナーとして事業創造が求められている。

イノベーションに向けた10年の取り組み

同本部の10年を振り返ると、「トップダウン」、「ミドルアップ/ダウン」、「ボトムアップ」の段階を経てアイデンティティの確立と意識改革に取り組んできたが、イノベーションを起こす上で大切なのは「多様性」だ。異なる考えを持った人びとが集まれば意見はまとまりにくい、これまでにない新しい発想も生まれる。ある研究では、多様性が高まればイノベーションの平均的な価値は下がっていくが、一方で突出したイノベーションが生まれ得ることが示されている。

イノベーションを起こすために必要なこと

同じ企業に長く勤めていると、たとえ職種が違って同じDNAになってしまう。だからこそ外部のネットワークも積極的に活用し、自分たちと異なるDNAを持つ者と仕事をすることが重要だ。またイノベーションのプロセスについて非常に強く感じているのは「もはや個社で課題を解決している場合ではない」ということだ。社外のネットワークを使って自身がやりたいことの実現に動いているイントレプレナーは、どの企業にも必ずいる。これからはそういう人たちの企業クラスタを構成し、さらにそのクラスタを接続したネットワークを構築することで、多様な議論と具体的なアクションを重ねていきたい。

コーディネーター総評

イノベーションにはダイバーシティが不可欠であるが、ダイバーシティによって必ずしもイノベーションが起こるわけではない。イノベーションは矛盾結合であるため、ダイバーシティだけではアウトプットは右肩下がりになってしまう。だからこそトップマネジメントの意思決定が非常に重要になってくる。P&Gやユニリーバはオープンイノベーションを行い、売上高に占める特許相対値を下げる一方、営業利益率は伸ばしている。外部から様々な技術や知恵を取り込み、イノベーションを起こしている良い事例だ。ワークショップは「場の論理」、「集合知」など場所が生み出す力を持っている。たとえば日立製作所は取締役会をインドで開き、キヤノンは製品開発を1週間の合宿で行っている。JTインターナショナルは本部を置くスイスで、多様な人材による意思決定を行っている。

バックキャストの事例では、デュポンが未来を予測し、複数のシナリオを立てた上で農業分野に進出することを決定した。たとえ現実が描いたシナリオ通りに進まなくてもIT技術の進歩によりシミュレーションのスピードと精度は格段にあがっているため、状況に応じて戦略は変更できる。伊原木氏の講演では未来を予想し、シナリオを描き、実績と擦り合わせていく、このPDCAサイクルを速く、うまく回していける企業が生き残るということを示唆いただいた。



日本の技術をコアとしたビジネスモデル について－LIXILの取り組み

2014年11月12日開催

株式会社LIXIL 常務執行役員
総合研究所長 小田 方平様



講演概要

＞ LIXIL総合研究所のミッション

LIXIL総合研究所は、「世界で最も難しい住生活に関わる課題を解決する」ことをミッションに、世界に山積する社会問題や環境変化を新たな事業機会と捉え、「ゼロエネ建築」、「高齢化」、「資源」、「グローバルインフラ」、「情報化社会」という5つのテーマを中心に研究を進めている。

＞ ケニアにおける次世代エコサニテーション事業とその可能性

「グローバルインフラ」の研究では、次世代サニテーションの事業化を目指し、ケニアの都市部で超節水型水洗トイレ、郊外で循環型無水トイレを中心としたインフラユニットの実証実験を行っている。超節水型水洗トイレは日本で災害時の設備として、循環型無水トイレは下水道インフラのメンテナンスにかかる莫大なコストの問題を解決する糸口として先進国でも注目されており、リバースイノベーションの可能性を秘めている。

＞ スマートハウスの実証実験と未来

「情報化社会」の研究では、オープンイノベーションによる顧客価値の創造と社会問題の解決を目指し、他企業と協力しながら「住む人」と「住まい」、「社会」とをICTで融合した「住生活の未来」を創造する拠点を作っている。今後スマートハウスは、暮らしから得られた情報を他の情報と融合させ、生活者により役立つ情報やサービスを提供するものになっていく。状況、行動、結果によって総合的な生活価値を向上させることは住宅建材メーカーとしての使命であるが、グローバル競争が激化するなか1社で社会課題を解決することは困難であるため、今こそ全日本の知恵で仕組みを作り、海外に展開すべきだと考えている。

コーディネーター総評

新興国におけるビジネス展開には「CSR・慈善事業」、「ソーシャルビジネス」、「BOPビジネス」、「通常ビジネス」、「リバースイノベーション」という5つのカテゴリがある。新興国で社会問題を解決することを主眼としたBOPビジネスには、ユニリーバのインド現地法人HULやボーダフォンの子会社であるケニアのサファリコムがあげられる。HULはシャクティブプログラムというBOPを展開しつつユニリーバよりも高い純利益率をあげ、サファリコムもM-Pesaという決済・送金サービスによって10%を超える純利益率を出しながら、さらにこの仕組みをアジアにも拡大しつつある。またリバースイノベーションでは、GEがインドで開発した軽量小型な心電計が、救急車に搭載できるようになったことで世界約170カ国に広まったという事例もある。

日本企業の進出は欧米に比べると歴史が浅く、遅れを取っている。しかし新興国の社会問題に対して自社の経営資源の投下の可能性と利益追及という矛盾の実現を模索する過程で「イノベーション」は起こり得る。始まりはCSRだとしても、同じ志を持った他社と協業できる可能性や本来取り組んでいたフィールドとは異なる分野に進出できる可能性もある。こうした試行錯誤のなかから生まれる新しいビジネスの芽が、最終的には日本企業の競争力の回復につながると考えている。LIXILグループの取り組みはこうした日本企業のモデルになるのではないかと大いに期待している。



日本のサービス産業の海外進出と課題 — 中小・中堅、地方企業の事例をふまえて

2014年12月11日開催

日本貿易振興機構(ジェトロ) 総務部 総務課長 兼
生活文化・サービス産業部 主査 北川 浩伸様



講演概要

▶ サービス産業の海外進出の現状

日本企業の海外進出といえば製造業のイメージが強いが、近年は流通や小売、外食、教育といったサービス産業でも海外を目指す企業が増えており、中小企業の進出も今後ますます増えていくだろう。また、急速に変化するアジアのマーケットにおいて特にB to Cのビジネスであれば、特定都市の市場に着目することは非常に重要である。

▶ 日本企業の海外進出事例

タカシマヤ・シンガポールは人材の定着化で成功している。人材確保には苦勞するが、いかに日本流のサービスを理解してもらい提供できるかが鍵を握る。紀伊国屋書店は、豊富な洋書を競争優位の源泉にアジアでのモデルをドバイなどにも展開している。自分たちのコアコンピタンスをもとにビジネスモデルを横展開することも拡大の要だ。また、バンコクでカフェを経営する島根の中村茶舗は、現地パートナーの選定に成功した好例である。B to C型の海外進出においてパートナー選定は非常に重要であり、新潟のラーメンレストラン三宝もこの好例だ。

▶ 日本企業の海外進出に向けたポイント

海外進出に対する企業戦略のポイントは、海外の市場に自ら「限定性」をかけないことだ。市場は自分の目で見て歩き、商材の現地適応については経営者が判断すること。店舗は最大の広告であり口コミも重要である。また、各国地域の「親日度」にも注目し、何よりパートナーには実際に会い、自分の感覚で確かめるべきだ。日本のサービスの優位性とは何かを見極め、現地での強みを考える必要もある。海外進出の形態は多岐にわたるが、会社規模に関係なく成功するチャンスがあることを肝に銘じ、ぜひビジネスチャンスをつかんでほしい。

コーディネーター総評

海外進出を戦略論という側面から考えると、サービス産業に限らず、すべての企業において自分たちの「強み」が何かを洗い出すことが非常に重要な作業であることがわかる。

基本的な戦略論としては自社の「強み」、「弱み」、「機会」、「脅威」について考えるSWOT分析とマクロの「脅威」と「機会」を洗い出したうえで内部の「弱み」と「強み」を考えていくTOWS分析がある。また「顧客」、「自社」、「競合」を基本とした3C分析や、そこに「チャネル」、「コミュニケーション」の要素を加えた5C分析も有効だ。さらに既存マーケットのなかで激しい競争を行うレッド・オーシャン戦略と、競合相手もない新規市場でビジネスを行うブルー・オーシャン戦略とがある。誰もがブルー・オーシャンを望むが、市場において立地、ターゲット、ブランド、人材などすべてが都合よく揃うことはほぼ皆無だ。何か足りない状況で戦略論を考えていけば、何に最も注力し、何を捨てるべきなのが見えてくる。ぜひ自社のサービスや製品で戦略マップを描き、それを他社と比較してみてください。変化の激しい市場においては「誰に」、「何を」、「どのように」を常に考えPDCAを速く回転させる必要があり、講演でご紹介いただいた企業は自社の「強み」を活かしスピードと変化に柔軟に対応してきた良い事例だと思う。



イノベーションワークショップ2014 —参加者の声—

ワークショップの参加者には事前課題として講義のテーマに関連するケーススタディが課され、講義後に毎回活発なグループディスカッションが行われました。

第1回 業務改革を支える“MUJI流”システムの取り組み

- ・ 実務に即したお話で大変勉強になりました。システムの構築と改革の推進は、シンプルな発想が大事であることがわかりました。
- ・ SCMのみならず、人材育成、ボトムダウンの進め方、グローバル化への対応など密度の濃いお話をいただき参考になりました。
- ・ 業界、業種、職種が異なる方々と意見交換をすることで新たな視点での気づきもあり、刺激的で有意義なワークショップでした。視点を変えて考えることが重要だと思いました。

第2回 イノベーションと多様性—Who is least like me?

- ・ グローバルな意見交換の方法が新鮮で、非常に興味深かったです。
- ・ 真にイノベティブな企業は、イノベーションにどれほど資源と労力をかけられているかを目の当たりにし、ある意味ショックを受けました。イノベーションを声高に語るのは簡単ですが、事業化にまで結びつけるのは根気のいる作業だと感じました。
- ・ 未来を想定することの難しさを感じました。多様な視点で物事を考えることが大切だと痛感しました。

第3回 日本の技術をコアとしたビジネスモデルの可能性について—LIXILの取り組み

- ・ 新興国での事業展開は、日本の技術をそのまま持ち込むのではなく、現地に見合った形に直して展開すると同時に、現地の雇用を確保することが重要だと学びました。アフリカでのビジネス展開について深く考えさせられました。
- ・ 「現地の課題を現地のリソースを使って解決する。超現実的な発想で」というコメントが非常に参考になりました。
- ・ 究極の環境において何を優先して問題を解決すべきかという問いに対し、顧客の求めているその先の問題、真の解決すべき問題は何かまでをきちんと深掘りする重要性を学びました。

第4回 日本のサービス産業の海外進出と課題—中小・中堅、地方企業の事例をふまえて

- ・ 事例が豊富でわかりやすく勉強になりました。アジアの現状がビビッドに理解できました。
- ・ 海外進出におけるパートナー作りやマーケティング手法、考え方、成功の鍵など多くの示唆がありました。今後の具体的なアクションの参考にしたいです。
- ・ ドメスティックな業界にいるものとして非常に参考になりました。インバウンド需要を取り込むにあたっての戦略立案に役立てたいと思います。



キッズ企画

未来を担う子どもたちの夢・可能性を広げよう

職業体験プログラム



FIFは2006年の設立当初からキャリア教育活動の一環として、小中学生を対象とした職業体験プログラムを実施しています。職場体験やトップとの対話を通じて仕事の楽しさややりがいを体感し、早い段階から社会に関心を持ってもらうことを目的としています。

コンセプト

社会の “しくみ”を実感

企業の役割や商品・サービスが提供されるまでの裏側をさぐり、今まで気づかなかった社会の“しくみ”を実感する。

社会人として あるべき姿の模索

企業のトップや働く大人たちとの対話をとおして、社会人としての理想像やリーダー像、将来の夢をより現実的に描く。

働くことの楽しさや やりがいを体感

学校や家庭とはひと味違う、オフィスや工場での様々な体験をとおして、働くことの楽しさややりがいを体感する。

プログラムの特色

参加者一人ひとりが“体験すること”を大切に、協力企業とともにそれぞれの企業の特色を活かしたオリジナルプログラムを企画しています。

企業・団体のトップとの対話、ふれあい

ふだん接する機会が少ない企業・団体のトップの方々の話をきいたり、直接質問したりすることで、仕事への情熱や経営に対する姿勢を学ぶ。

普段は見られない場所やしくみの見学

関係者以外には公開することのない研究所やシステムなどを見学し、その企業・業界における最先端の技術やしくみにふれる。

現場での職業体験

店舗やオフィスで実際に行われている業務を大人といっしょに体験しながら、働いている人の想いやプロの仕事を肌で感じる。

物流の最前線

制服を着ての荷物の配達実習や物流センターの見学、会長との名刺交換や質疑応答を体験し、物流のしくみについて学びました。
2014年で7回目を迎え、これまでに120名を超える子どもたちを受け入れました。



1 宅配便が届くしくみを学習

2 トラックの見学・乗車体験



3 配達用自転車の試乗



トラックにもいろいろな大きさがあったびっくりした



4 配達の予行演習



7 栗和田会長との質疑応答



まごころも届けるという考え方に感動しました

6 最新鋭の物流センターの見学



発送が全自動だったのがおもしろかった

5 荷物の配達実習



佐川急便株式会社社長
栗和田 榮一 様

子どもたちと対話することで、心が若返る気がします。私にとっても年に一度の貴重な体験となっています。荷物が届くまでには多くの人の力があることがわかったと思います。この体験をきっかけに、自分の将来の仕事について考えてくれたら嬉しいですね。

実施概要

日時：2014年4月4日(金) 10:00～16:00
会場：佐川急便株式会社 東京本社 (東京都江東区)
参加者：小学6、中学1年生 17名
共催：佐川急便株式会社
フューチャー イノベーション フォーラム
協力：フューチャーアーキテクト株式会社
後援：江東区教育委員会、品川区教育委員会

セキュリティの最前線

普段は入ることができない基地局の見学や機械警備システムの操作体験、最先端セキュリティ技術の授業や社長との質疑応答を通じて、人と機械の力で社会の安全を守るしくみを学びました。2013年度に続き2回目の開催となりました。



1 東京ガードセンターの見学



2 機械警備の実習



3 警備ロボットの見学



ロボットが人の顔を
覚えられるなんて
びっくりした!



6 青山社長から 修了証授与



5 AEDの操作体験



むずかしかった
けれども、やれた
達成感があった!

4 小型無人 飛行機の操作体験



小型ヘリコプ
ターを操作で
きて楽しかった



実施概要

日時：2014年8月6日(水) 10:00~16:00
会場：ALSOK 本社
(東京都港区)ほか
参加者：小学5、6年生 19名
共催：ALSOK
フューチャー イノベーション フォーラム
協力：フューチャーアーキテクト株式会社
後援：品川区教育委員会

命の大切さを学んでほしいと、AEDや防犯、防災についても紹介しましたが、予想以上に反響があって楽しかったです。子どもたちが率先して取り組んでくれたことも嬉しかったですね。これからも新しいことにどんどん挑戦する意志をもった人になってほしいと思います。

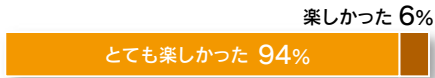


ALSOK社長
青山 幸恭 様

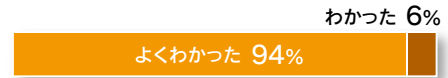
職業体験プログラム —参加者の声—

F I Fはプログラム終了後、参加した子どもたちと保護者の方々にアンケートを実施し、プログラムの見直しや運営の改善に役立てています。アンケートへ寄せられた声の一部を紹介します。

質問1 参加してみてどうでしたか？



質問2 訪問した会社がどんな会社か、どんな仕事をしているのかわかりましたか？



質問3 印象に残ったことはなんですか？

物流の最前線

- ▶ 佐川急便の人たちが明るいこと。
- ▶ はたらいっている女性が多いこと!!
- ▶ 1日に約400万個の荷物を運んでいること。
- ▶ わたしたちが寝ている間にトラックで運んでいておどろいた。
- ▶ 発送が全自動だったのがおもしろかった。
- ▶ 佐川急便は真心を運んでいるということに感動した。

セキュリティの最前線

- ▶ ガードセンターの監視や指令をしている人の数が多かった。
- ▶ 飛行ロボットの開発が進んでいること。
- ▶ ロボットが人の顔を覚えられるなんて驚いた。
- ▶ いのちの授業が心に残った。
- ▶ 社長さんが朝早くから頑張っていることがわかった。
- ▶ 青山社長の「ありがとうが一番うれしい」という言葉に感動した。

保護者の声

- ・荷物が手元に届くまでの流れを自分の目で見て、謎が解けたそうです。
- ・大量の荷物を早く正確に届ける最新大型物流センターを見学し、荷物の自動仕分け機のすごさと荷物に関わる人びとの仕事ぶりに感動したようです。佐川急便の制服を着ての体験は、自分が社員のような気分になれて、うれしかったと言っていました。
- ・担当の方が若いお兄さんだったので、働くということがそんなに先のことでないと実感したようです。
- ・栗和田会長が「また10年後に会いましょう」とおっしゃってくれたのがうれしく、心に残ったと言っていました。将来は物流か鉄道の仕事がしたいそうです。仕事は大変だけど、みんなのためになっている、自分も社会人になったら、仕事を頑張ろうと思うようになったと話してくれました。



保護者の声

- ・参加する前はALSOKという名前とCM、警備をしている会社だということしか知らなかったけれど、警備にも施設警備や雑踏警備、輸送警備、身辺警備など色々あることがわかったそうです。
- ・最新のセキュリティシステムや警備ロボット等の技術にふれ、とても感動したと言っていました。人の想いと機械技術があわさって私たちの安全・安心が守られていることを理解したようで、貴重な体験となりました。
- ・AEDの処置をうけて助かった球児が現在社員として働いていることや青山社長のお話、見学で疑問に思い質問したことなど、とてもうれしそうに報告してくれました。夏休みの自由研究のテーマにすると、はりきっています。
- ・イベントに参加して以来、デパートやスーパー、電車の中でAEDがないかチェックしている子どもを見るたびに、参加できてよかったと大変満足しています。



5年後の追跡アンケート調査

— 仕事に対する意識が変わりました —

2009年度に実施した職業体験プログラムの参加者を対象に、5年後の成長を追跡調査しました。
約9割の子どもたちが「当時のことを今でも覚えている」と答え、体験後、仕事に対する考えや意識が変わったと回答した子は約7割にのびりました。子どもたちの声を紹介します。



1. 「エネルギーの最前線」

JX日鉱日石エネルギー株式会社

実施:09年7月28日 神奈川県横浜市

- ・ 普段乗ることのできないタンカーに乗り、入ることのできない場所も見学させてもらったことは、すごくいい経験になりました。今でもたまに友人に自慢したりします。
- ・ 自分と同じくらいの歳の、でも住む地域や学んできたことが違う人たちと丸一日行動をともにして、多くものを見て回った経験は、同世代の周りの人を知るという意味でも刺激になりました。
- ・ 目に見える認知度の高い仕事だけでなく、そのおおもとの部分を支えている多くの職業にも目を向けて考えることができるようになったと思います。
- ・ 僕も地球環境に関わる仕事につきたいと思った。
- ・ 世界と関わる日本を支える仕事をしたいと思った。



2. 「医療現場の最前線」

聖マリアンナ医科大学

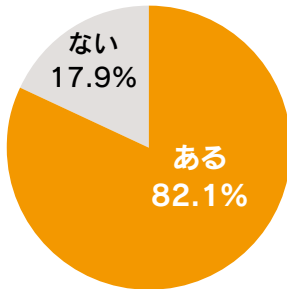
実施:09年8月5日 神奈川県川崎市

- ・ 普段見たことのない病院の裏側やエコー検査の実習を体験し、医療への関心がさらに深まった。
- ・ 医師という仕事は想像通りとても大変な仕事だと思いましたが、より強く医師になりたいと思い、勉強へのモチベーションが上がりました。
- ・ 元々医学部志望だったが、一度文転した。しかし医療の道に進みたいという思いが諦めきれず、薬学部へ進学した。
- ・ 入学した大学の学科は医療現場とはかけ離れていますが、将来は電子工学を利用して今の医療現場の助けとなる研究をしたいです。
- ・ 誰でも自分のなりたい職業に就けるわけではないが、別の職業に就いたとしても自分のベストをつくして仕事をするのが大事だと思うようになりました。



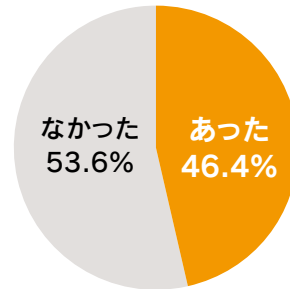
質問1

今でも心に残っている
ことはありますか？



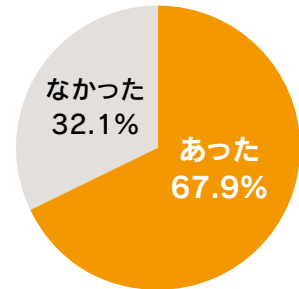
質問2

プログラム参加後、
進路に対する考え方に
変化はありましたか？



質問3

プログラムに参加して
仕事に対する意識に
変化はありましたか？



3. 「物流の最前線」

佐川急便株式会社

実施：09年4月2日 東京都江東区

- ・ 宅配便を届ける仕事を体験できて働く側の目線を知ることができた。
- ・ 実際に配達をさせてもらって、とても緊張したけど、最後にお礼を言われてうれしかった思い出がある。
- ・ 自分の周りでたくさんの大人が働いていることがわかるようになった。仕事の大変さや重要さに気づくことができた。
- ・ 仕事はお金を稼ぐだけでなく、いろいろなことが学べると思った。
- ・ どんな仕事でも責任を持ってしなければいけない。大切なことを学びました。



4. 「スーパーへGO! in 新潟」

株式会社魚栄商店

実施：09年8月21日 新潟県燕市

- ・ それまでは働く意識が全然なく遠いものだと思っていたが、このプログラムに参加して実際に仕事を体験することができ、自分が働く姿をイメージすることができた。
- ・ 実際に見て触れることで仕事の大変さや難しさを感じたが、やりがいや楽しさをより強く感じた。
- ・ 「仕事は大変」と思っていたが、「仕事は大変だけどやりがいもある」と思うようになった。
- ・ よいお店にはその分裏側で頑張っている店員さんがいることを学んだ。
- ・ 学校の授業でこのような場面が出たときに思い出すことで、より理解しやすくなった。



キッズ企画

未来を担う子どもたちの夢・可能性を広げよう

プログラミング教室



FIFは2006年の設立以来、イノベティブな人材の育成をめざし、小中高校生を対象にIT教室を実施しています。プログラミングの体験学習をとおしてITの楽しさや自らの発想で創造する喜びを体感するとともに論理的な思考力を養い、ITのおもしろさや可能性を感じてもらうこと目的としています。

コンセプト

ITへの 興味を喚起

ITのしくみを知り、技術のおもしろさやデジタルの可能性を感じることで、ITを身近に感じる。

“使う側”から “創る側”へ

自分の手で作りあげる達成感を味わうことで、ITを“使う側”から“創る側”に立つ喜びや楽しさを体感する。

ITで 社会をデザイン

ITをツールに、新たな社会のしくみを考え、変革を起こしていけるような力を身につける。

プログラム「お天気アプリを創ろう！」

普段使っているスマートフォンのアプリケーションがどのように作られているのかを学習した後、実際にiPad専用のお天気アプリを作成しました。試行錯誤しながらこだわりの詰まった作品をつくりあげました。

参加者の声

- ・プログラミングは初めてだったけど、とても楽しかった。
- ・今回体験してみても自分が体験した部分だけでもこんなに難しいのか、と驚きました。
- ・もっとプログラミングを勉強して、すごいものをつくろうと思います。

実施概要

日時：2014年8月8日(金) 13:00~17:00
会場：神奈川大学附属中・高等学校(神奈川県横浜市)
参加者：中学~高校生 10名
主催：フューチャー イノベーション フォーラム
協力：神奈川大学附属中・高等学校
企画：フューチャーアーキテクト株式会社



プレスクリッピング

2014年度も職業体験プログラムを中心に、テレビや新聞、ウェブニュースなど多数のメディアで紹介されました。

	日付	媒体	見出し
	02.06	リセマム	小学生対象の1日職業体験、佐川急便で荷物の配達実習など
	02.07	小学館ファミリーネット	佐川男子・佐川女子になれるチャンス 小学生対象・佐川急便 職業体験
	02.12	教育家庭新聞『KKSブログ』	5、6年生対象に職業体験プログラム、佐川急便で配達実習やトラックの乗車
	02.13	全私学新聞	小学5、6年生対象に職業体験プログラム 佐川急便で見学学習
	02.28	毎日小学生新聞特集	職業体験しよう
	04.04	テレビ東京ワールドビジネスサテライト	佐川急便が子ども物流体験会
	04.09	ケーブルテレビ日刊ベイネット	佐川急便 春休み職場体験
	04.14	日本流通新聞	佐川急便 宅配便を届けたい! 小中学生が職業を体験
	04.15	CycleStyle	子どもたちが佐川急便の配達用自転車に挑戦
	04.17	リセマム	職業体験5年後の追跡調査、7割が仕事への意識に変化
	04.21	教育家庭新聞『KKSブログ』	7割近くの子どもたちが変化を実感～「職業体験プログラム」参加者の5年後
	04.28	日本流通新聞	職業体験から5年後 7割の子どもに意識変化 FIF調査
	05.13	全私学新聞	小中学生が佐川急便で職業体験 物流の仕組みを学ぶ
	06.11	リセマム	小学5・6年生対象、ALSOK職業体験…人と機械の力で社会を守る
	06.11	ICT教育ニュース	FIFとALSOK／最新セキュリティを学ぶ小学生職業体験プログラム 8月開催
	06.12	夏ぴあファミリー こどもと遊ぼう	ALSOKのお仕事体験! 小学5・6年生20名募集
	06.29	毎日小学生新聞	夏休み 挑戦しよう 体験しよう「ALSOK職業体験 セキュリティの最前線」
	07.24	carview!	首都高 子ども支援プロジェクト、岩手の小学生らを東京へ招待
	07.25	Response	首都高子ども支援プロジェクト、被災地の小学生親子を招待
	08.01	Car Watch	首都高、陸前高田市の小学生を招いて施設見学などのツアーを実施
	08.01	日刊建設産業新聞	陸前高田から40人参加 子供支援プロジェクト 首都高
	08.01	日刊建設工業新聞	東日本大震災被災地の子どもたち招き1泊2日ツアー
	08.05	日刊建設工業新聞オンライン	首都高速会社／被災地の子どもたち招待、都内で1泊2日ツアー開く
	08.06	J:COM 港・新宿『じもとび』	小学生が参加「1日職業体験プログラム」
	08.06	東京メトロポリタンテレビジョン TOKYO MX NEWS	夏休みの子どもたち 仕事現場で職業体験!
	08.10	セキュリティ産業新聞	監視基地局など見学 小学生対象の職業体験プログラム開催
	08.15	J:COM港新宿『週刊みなしんワイド』	セキュリティの最前線
	08.15	警備新報	小学5・6年生キャリア教育「セキュリティの最前線」
	08.16	日刊建設通信	陸前高田市の親子20組招き施設見学／首都高速
	08.21	警備保障タイムズ	ALSOK職業体験プログラム開催 小学5・6年生を対象に
	10.02	Logistics Today	「MUJII流システム」は7割主義、良品計画・小森氏講演
	12.25	東京都教育委員会	職業体験プログラム「社会の最前線」

物流の最前線

日本流通新聞
2014年4月14日付

まいどありがとうございます。4日、佐川急便（鈴木秀夫社長）の東京本社で、春休みを利用した小学6年生、中学1年生対象の職業体験プログラムが行われた。子どもの職業体験などを企画する「フューチャー・イノベーションフォーラム（FIF）」の協力のもと実施。東京、神奈川、千葉、埼玉から応募があった男女17人が参加した。子どもたちは、佐川急便の制服を着こみ、名刺

佐川急便 宅配便を届けたい！ 小中学生が職業を体験

交換の練習から送り状の記入、集荷、お客様との接客、配達実習まで、ドライバーが行う業務そのものを体験した。1日当たり24万個の荷物を取扱う、都内最大級の物流施設「佐川東京ロジスティクスセンター」では、特長の自動仕分け機を見学した。集荷した荷物を、子どもたちが自らベルトコンベヤーに



ベルトコンベヤーで次々と運ばれる荷物に歓声をあげる。今回は、7回目。佐川急便では「体験を通して、仕事への心構えや協調性を学ぶ」として、賞状をもらって嬉しいと話している。また、FIFにも、受け入れ先の企業からも「仕事を身につけ、将来の良い機会になっている」とい

全私学新聞
2014年5月13日付

小中学生が佐川急便で職業体験
物流の仕組みを学ぶ
フューチャー・イノベーションフォーラム
この日は抽選で選ばれた小学6年生、中学1年生17人が佐川急便の制服を着こみ、トラックの乗車体験のほか、都内最大級の物流施設「佐川東京ロジスティクスセンター」で荷物の自動仕分け機などを見学しながら宅配便が届くしくみを学習し、荷物の配達実習を行った。



荷物の配達実習を体験

組みななどを学び、荷物の配達実習も体験した。また、同社の栗和田栄一会長との質疑応答では、会社をどうやって大きくしてきたのか、などの質問が寄せられた。また、備えている「佐川東京ロジスティクスセンター」で荷物の自動化されているのに感動したという感想が上

CycleStyle
2014年4月15日

CycleStyle

ホーム 新製品 オピニオン ウェアラブル スポーツ イベント エンタメ
試乗会 レース

イベント > 展示会 > 記事

イベント 展示会

2014年4月15日 (火) 12時00分

子どもたちが佐川急便の配達用自転車に挑戦

Facebookでシェア >

Tweetする >

> 佐川急便 特別編集

メールでメッセージを送る



フューチャー・イノベーションフォーラムは4月4日に佐川急便の協力のもと、同社東京本社にて職業体験イベント「物流の最前線」を実施した。



今回7回目を迎える「物流の最前線」はFIFが企画・運営。この企画は2007年にスタートし、体験を通じて社会のしくみや働くことについて考える「キャリア教育の場」として、これまでに120名を超える子どもたちを受け入れてきた。

当日は抽選で選ばれた小学6年生、中学1年生17名が佐川急便の制服を着用し、トラックの乗車体験のほか、都内最大級の物流施設「佐川東京ロジスティクスセンター」で荷物の自動仕分け機などを見学しながら宅配便が届くしくみを学習し、荷物の配達実習を行った。



《磯崎遠太郎》

追跡アンケート調査

リセマム

2014年4月17日

トップ > 教育・受験 > その他

職業体験5年後の追跡調査、7割が仕事への意識に変化

2014年4月17日(木) 11時03分

子ども調査 に関する記事
 東京都「小学生の身の回りの事故防止ガイド」作成
 トイタワーハイは「目標とする大会」、郵活動は1日3時間半…出場高校生…
 習い事の月平均13,888円…年齢とともに上昇、小5から学習茶へシフト

メルマガ購読 Check **ツイート** 3 **いいね!** 0 **グ+** 0

Ads by Google [> 塾大学](#) [> 塾留学](#) [> 塾進学](#) [> 塾受験](#)

フューチャーイノベーションフォーラム(FIF)は4月16日、職業体験プログラムに参加した子どもたちの5年後の追跡調査を発表した。67.9%の子どもたちの仕事に対する意識に変化があったことが明らかになった。

FIFは2006年の発足から現在までに計59回のプログラムを開催し、のべ1,847名の子どもたちが参加しているという。今回で4回目となるこの調査は、2009年度実施イベントの参加者61名(当時小学4年～中学2年生、現在中学3年～大学1年生)を対象にアンケートを実施し、28人の回答を得た。調査期間は、1月14日～3月15日。

職業体験したことについて、今でも心に残っていることはあるか聞いたところ、「ある」82.1%、「ない」17.9%と、8割以上の子どものみが5年を経過した現在でも職業体験のことを心に残っていた。

プログラム参加前後、選別に対する考え方に変化があったか聞いたところ、「あった」46.8%、「なかった」53.2%だった。JR日鉱石エネルギーの「エネルギーの最前線」に参加した子どもも「僕も地球環境に関わる仕事につきたいと思った」「目に見える認知度の高い仕事だけでなく、そのおおもとの部分を支えている多くの職業にも目を向けて考えることができるようになった」といった意見が寄せられた。

プログラムに参加して仕事に対する意識に変化があったか聞いたところ、「あった」67.9%、「なかった」32.1%だった。聖マリアナ医科大学の「医療現場の最前線」に参加した子どもも「誰でも自分のなりた職業になれるわけではないが、別の職業に就いたとしても自分のベストをつくして仕事をこなすのが大事なのだと思うようになった」などの意見が寄せられた。

FIFは、今後も多くの企業とともに子どもたちの好奇心を育むプログラムを企画していくという。

日本流通新聞

2014年4月28日付

職業体験から5年後 7割の子どもに意識変化

FIF調査

子どもの職業体験など企画するフューチャーイノベーションフォーラム(FIF)事務局(東京都品川区)は、2009年度に職業体験プログラムに参加した子どもたちの5年後の追跡調査を発表した。67.9%の子どもの仕事に対する意識に変化があったことが明らかになった。

今年1月14日から3月15日の2カ月間をかけた調査(調査方法・概要、インターネット)を実施。28人から回答を得た。それによると「今でも心に残っている」とはありまじかとの問いに、あるとの回答が82.1%、「ない」は17.9%となった。「プログラム参加後、進路に対する考え方は変化があったか」という問いに「あった」が46.8%、「なかった」が53.2%、「なかった」が53.2%だった。

職業体験したことについて、今でも心に残っていることはあるか聞いたところ、「ある」82.1%、「ない」17.9%と、8割以上の子どものみが5年を経過した現在でも職業体験のことを心に残っていた。

プログラム参加前後、選別に対する考え方に変化があったか聞いたところ、「あった」46.8%、「なかった」53.2%だった。JR日鉱石エネルギーの「エネルギーの最前線」に参加した子どもも「僕も地球環境に関わる仕事につきたいと思った」「目に見える認知度の高い仕事だけでなく、そのおおもとの部分を支えている多くの職業にも目を向けて考えることができるようになった」といった意見が寄せられた。

プログラムに参加して仕事に対する意識に変化があったか聞いたところ、「あった」67.9%、「なかった」32.1%だった。聖マリアナ医科大学の「医療現場の最前線」に参加した子どもも「誰でも自分のなりた職業になれるわけではないが、別の職業に就いたとしても自分のベストをつくして仕事をこなすのが大事なのだと思うようになった」などの意見が寄せられた。

FIFは、今後も多くの企業とともに子どもたちの好奇心を育むプログラムを企画していくという。

復興支援1泊2日ツアー

日刊建設工業新聞

2014年8月1日付

東日本大震災被災地の子どもたち招き1泊2日ツアー

首都高速道路公社は、東日本大震災で被災した岩手県陸前高田市の小学生と保護者20組40人を東京に招き、7月31日(8月1日)に首都高の関連施設を巡るツアーを行っている。首都高子ども支援プロジェクトの一環で、参加した親子は初日、東京都内のシールドトンネルの工事現場を見学し、休みの思い出づくりを兼ねた。

初日は、首都高の安全を支える西東京管理局(東京都千代田区)の交通管理室(写真)や、大橋建設局(写真)のシールドトンネルの工事現場(東京都目黒区)などを見学。2日目となる1日には首都高を利用し、東京タワーや品川アクアシウムなどに行く予定だ。

首都高速公社の菅原秀夫社長は「首都高速道路という大規模な社会基盤と、東京の観光地を満喫してほしい」と語った。

ツアー参加者の一人は「仮設住宅で生活しているのに、大きなビルが多い東京に来ると新鮮な気持ちになる。招待してくれて本当にありがたい」と語っていた。

お問い合わせ先

フューチャー イノベーション フォーラム

事務局: 〒141-0032 東京都品川区大崎1-2-2
アートヴィレッジ大崎セントラルタワー15階
(フューチャーアーキテクト株式会社内)

TEL: 03-5740-5817

E-mail: forum@future.co.jp

ホームページ

<http://fif.jp>



facebook

<http://www.facebook.com/fif.2006>



発行:2015年4月



Future Innovation Forum